

現在、南大東島で繁殖しているウグイスの分類学的位置づけ

○梶田 学（無所属）・高木昌興（大阪市立大学）・松井 晋（大阪市立大学）

山本義弘（兵庫医科大学）・山岸 哲（山階鳥類研究所）

南大東島は、沖縄島の東 400km に位置する海洋島である。この島には亜種ダイトウウグイス *Cettia diphone restricta* が繁殖するとされていたが、1922 年に 2 個体が採集された後、全く確認されないため、すでに絶滅したと考えられていた。しかし、昨年 4 月この島でウグイスの繁殖個体群が確認され、その分類学的な帰属、すなわち、この個体群が亜種ダイトウウグイスに分類されるのか否かが問題となった。この点を明らかにするため、本年 5~6 月に南大東島において♂20 個体♀1 個体について外部形態を調査し、沖縄島での生息が最近確認された亜種ダイトウウグイスを含む 5 亜種（亜種不明のトカラ列島中之島の個体群を含む）との比較を行った。8 形質の計測値を用いた正準判別分析の結果、南大東島個体群は中之島個体群と形態的な重複が大きく、本州や伊豆諸島の亜種ウグイス *C.d.cantans* ともわずかに重複が認められた。一方で、亜種ダイトウウグイスとは全く重複せず、明確に形態が異なることが明らかになった。羽色について、南大東島個体群の上面は全ての個体でオリーブ褐色であった。この点は計測値で非常によく一致する中之島個体群が褐色味の強い上面を持つとは一致せず、むしろ亜種ウグイスとよく一致した。亜種ダイトウウグイス（沖縄島）の上面は赤褐色味が強く、やはり現在の南大東島の個体群とは一致しなかった。なお、亜種ダイトウウグイスの原記載に掲載されている外部形態のうち最も特徴的な羽色（上面が錆褐色）と全嘴峰長（♂19mm）は、現在の南大東島の繁殖個体群の形態（上面オリーブ褐色、全嘴峰長♂16.5-18.4mm）とは一致しなかった。

さらに、昨年 4 月に南大東島にて捕獲された 3 個体について、mtDNA の ND5 から 12SrDNA 領域まで約 5700bp について塩基配列を決定し、他の地域の 21 個体と比較を行った。NJ 法と ML 法による比較解析の結果、南大東島産の個体は、いずれも亜種ウグイス（本州・九州産 n=6）と最も近縁となり、亜種ダイトウウグイス（n=3）とは明確に異なることが明らかとなった。南大東島個体群と形態計測値がよく一致した中之島個体（n=3）は、亜種ダイトウウグイス程ではないが、南大東島個体とは遺伝的類縁がやや遠かった。

以上の結果から、南大東島の繁殖個体群は、亜種ダイトウウグイスとは同一分類群ではないと考えられる。また、羽色は亜種ウグイスに、測定値は中之島の個体群に一致するが、このような形質に一致する分類群は現在までのところ確認されておらず、今のところどの分類群にも位置づけることができない。遺伝的に本州・九州産の亜種ウグイスに近縁なものであることを考え合わせると、本土から侵入したのち、すでに形態的な分化を生じたものである可能性も示唆される。ただし、亜種ウグイスの中に南大東島個体群と測定値の一致する個体が稀（104 個体中 2 個体）に認められることから、そうした個体が南大東島に侵入したことによる創始者効果の可能性も考えられるであろう。